

## &lt;営業所めぐり&gt; その3

## 農産物増産への協力を強調する

## 堀田 (大阪営業所長) さんの情熱

河見 泰成

## 徳島に降ったのに、降らぬ香川

## 四国山地と讃岐山脈の存在がうらめしい

もうこれ以上雨がなければお手あげだ—と心配された6月からの干ばつも、8月中・下旬に入ると、さすがに秋の気配がただよい、気圧の崩れとともに週期的に降雨を見るようになって、日本中がホッと一息ついた。

肥料に関係する者の1人として当然のことながら、筆者は、1日も早く気象状態が好転せんことを切望していたものだ。そこで「台風6号の余波—四国地方に慈雨」というような見出しを見ると本当に“有難い”と思ったが、その記事には“高松地方は雀の涙”という但書がついていた。しかもすぐ隣の徳島にさえ、雨らしい雨が降ったというのに…。

こういうとき、筆者は「四国山地」或は「讃岐(さぬき)山脈」がうらめしく、高松地方在住の方々の生活の苦しさを憶ったものだった。

結局ことしの干ばつの総決算は、全国被害見込金額約894億円、内訳は次の通りである。

(単位100万円)

水陸稲計	27,300	かんしょ	756
水 稲	21,000	ばれいしょ	1,010
四 麦 計	55		
雑穀・豆計	3,010	(被害量 らっかせい 27.100 トン、あずき 6,650トン、だいず 9,290トン)	
野 菜 計	28,400	(被害量 さといも 78,700トン、 きゅうり 48,400トン、とまと 49,500トン なす 34,000トン、すいか 58,600トン)	
果 樹 計	13,300	(被害量 みかん 82,300トン、 りんご 39,400トン、ぶどう 13,100トン、 もも 21,700トン)	
工芸農作物計	7,110	(被害量 こんにゃく12,700 トン、たばこ 2,910トン)	
飼料作物計	6,520	桑 1,540 茶 81	

その他農作計 355 (被害量 花 9,469千本、芝 58ha 2トン)

(これらの算出基礎：桑の被害量は繭に換算したものである。被害見込金額は、「政府買入価格」、「昭和47年(概算)農業総産出額および生産農業所得の推計に採用した価格」等を用いて試算したものである。)

では、被害見込金額でそれぞれ約59億円、約126億円と報告されている近畿地方と中国・四国地方の被害面積と被害量はどうか、次頁の表をご覧願いたい。

こういう状況下にあつて、連日現地で自動車を駆り、活躍された県担の皆さんのご苦勞はさぞ大変なことだったと思う。同時に、42年のそれに匹敵すると云われた、今夏の干ばつ試練を乗り切った大阪営業所の表情を取材したいと考えて、筆者は去る9月7日新幹線で西下した。

## 肥料界の中にいる者と

## 側面からしか見ない者とのちがひ

ちょうどこの日、チッソ旭肥料大阪営業所では販売会議が開かれていて、筆者が到着した頃は、“さて、これから午後の会議をはじめようか”というところであった。

暫らく振りに見た大阪ビルの内外はすっかり改装されて明るく、面目を一新していた。ビルの明るさが反映した訳ではあるまいが、会議室の空気は非常に開放的な感じがただよっていたのが、印象的であった。

“ようこそ、まあこゝへおかけ…”と堀田所長にうながされて、正面中央の椅子に腰を下ろして見回すと、“久しぶりじゃのう”と云いたげな顔、顔がならんでいる。いずれも現地訪問でお世話になった顔だが、見るなりパッと姓名と重なる顔があるかと思うと、しばらく考えているうちに姓名が浮かんで来る顔もあるが、中にはチョイと

作物名	近畿農政局管区			中国・四国農政局管区		
	被害面積		被害量	被害面積		被害量
	計	うち 30%以上		計	うち 30%以上	
	ha	ha	t	ha	ha	t
水陸稲	16,200	2,870	11,600	35,200	5,860	23,700
四麦	—	—	—	—	—	—
かんしょ	1,140	226	3,020	3,640	680	12,100
ばれいしょ	—	—	—	20	—	26
雑穀・豆	2,120	266	389	7,070	1,450	1,790
野菜	7,500	1,080	27,300	12,000	2,260	48,300
果樹	14,500	597	35,100	30,100	2,350	64,200
工芸農作物	166	11	143	2,420	190	1,410
飼料作物	1,080	130	9,990	9,550	1,670	77,200
桑	158	6	6	2,560	662	129
茶	462	3	305	479	83	424
その他農作物	32	4	496千本	613	8	56ha
総数	43,400	5,200	{ 496千本 87,900	103,700	15,200	{ 5,320千本 5,320千本 229,200
被害見込額	約59億円			約126億円		

姓名と重ならない顔もある。(失礼)

“ハテ誰だっけなあ?”と記憶を追いつけると、

“「営業所めぐり」の第1回目に、肥料売込みの逐鹿戦(ちくろくせん)と書かれとったが、あれはチト感心できんなあ。なぜかて、わしらはあゝいう思想で仕事はしとらんもの…。食糧や、その他の農産物の増産に何とか寄与したい—そういう基本的な考えで仕事をやとるのですわ。全農さん、関係各府県経済連さん、そいから各地区農協さんの肥料配給業務に協力させて頂くからには、各府県の試験場、大学、そいから普及所に各種の試験やらご指導をお願いして、得られたデータにもとずいて慎重に仕事を進めとるのですわ。従って、肥料の流通面を、あゝいう風に表現することは、わたしらの気風と合わんですわ…”と堀田さんが声をかけられた。

“なるほどそうですね。私はいつも記者としての立場から、ものを見ていた訳です…”と、筆

大阪営業所会議室にて



者は完全にシャッポを脱いだ。肥料に関係があると云っても、業界の中にいる人と、常に側面からしか物をみていない者との違いであろう。

### 関西農業の特徴は何か

#### 多彩・集約型と積極性

“今となってはご覧の通り和気あいあい、皆んながよう動いてくれるので何も云うことはない。合併会社の内部が融和するまでは、とかく何かとトラブルが起り勝ちのようです。が、考えてみると、一つには双方に遠慮があるためにそうなるので、お互いの遠慮を無くさなあかんと思うたのでつとめて開放的に行動しましたよ…。お蔭で、この頃はごらんの通りです。なお、細かいことについては県担なり林君におきき下さい”と、堀田さん。なかなかご苦労なことである。

関西農業の特性について所長代理の林さんは次のように語っている。

“関西の農家は、いわゆる「西南団地型」農業というのか、果樹、野菜、水稻などに積極的に進出しております。非常に研究熱心でもあり、常に他人より良い物を作ろう作ろうと考えとるようすね。ですから生産技術なども西から東へと移動して行ってるようです。いわば多移な農業経営なので、地域によっては商系と強いつながりを持っている産地があるといったように、肥料なども有機、配合、各種の化成肥料や緩効性肥料など、いろいろな肥料が使われております。”

“このように早くから開けた関係上、旧産地が多いので、動向予断を許さぬ後進県とどのように対応して行くかが、当面の重要課題でしょう。しかし、ことし干ばつ被害を受けたみかんのうち、愛媛の作柄は四国の他の3県が83ないし85という指数であるのに対して、ひとり90%を誇示しています。そして予想収穫量では静岡を抜いて「日本一」になりました。これは品種改良の結果かも知れませんが、6月以降の干ばつを予想して、その対策をたてていたそうで、その背景は昭和42年の大干ばつの体験を生かしたということでしょう。”

(編註：愛媛県のみかん予想収穫量 早生160,800, 普通404,100, 計564,800トン 静岡県 早生63,900, 普通321,100, 計379,700トン)

“なお当社の肥料ですが、CDU燐加安もお蔭様で定着しましたね。有機入り燐硝安加里との競合？その点は心配ありません。これはこれ、あれはあれ…ということです。燐硝安加里とともに園芸関係への伸びが期待されます。”

#### 42年の大干ばつと同じペース

##### 役に立ったそのときの体験

今夏の干ばつは、山陰の鳥取、島根の両県は別として、山口、広島、愛媛、香川など、瀬戸内海沿岸地域がひどくやられたのが特徴的である。

販売会議席上で、県担の皆さんから伺った、2、3の県の干ばつに関する状況を示すと次のようである。

香川県：被害面積は3,000町歩とみられているが、何しろ例年の1/3程度しか降雨がなかったというから想像がつかう。あと10月も雨が降らなかつたら、お手あげだったそう。

愛媛県：今治市を中心とする瀬戸内沿岸がやられているが、特にひどいのは島嶼地帯で、県では肥料、農薬など各生産資材費の軽減などの対策が考慮されているようだ。

西南地域の八幡浜方面も6、7月から降雨がなく6号台風が若干雨を落して行ったが、ことしの干ばつは、42年に中国、四国を襲ったあの干ばつとほとんど同じペースだったという。しかし、さすがに42年の大干ばつの経験はむだではなく、摘果につとめるなど、ことし愛媛県が日本一の座を占

める素地を作った。

山口県：ここも瀬戸内に面した地域、特に島嶼都がひどくやられている。柑橘産地として知られている大島では、42年より雨が少なかったそうである。が、立枯れたものはあまりないということである。

#### 気鋭の県担の皆さん

さて、肥料に関係して15年歴のベテラン堀田浩さんを所長とする、チッソ旭肥料大阪営業所は、次長に木村節夫、所長代理に林隆夫、水野勲、四国出張所長に知念弘道の5氏が、ガッチリ腕を組んで内外の衝に当り、このほか県担として(敬称略)

玉木宣彦(山口県担当) 西森 孝(福井県、京都府、兵庫県=淡路島) 立川詔三(広島県担当)

柴田浩志(和歌山県、大阪府担当) 後藤 勇

(奈良県、兵庫県=淡路島を除く) 小畑 清(鳥取県、島根県担当) 大江 勲(滋賀県担当)

宮永長夫(岡山県駐在) 平田貞夫(愛媛県担当)

保田武夫(香川県担当) 堀尾昌志(徳島県・高知県担当)

など11人の気鋭の県担の皆さんが、連日のように現地で自動車を駆って活躍されている。

所長代理の林さんが云われたように、いわゆる西南暖地型の多彩・集約型農業が行なわれているだけに、産地によっては商系と強いつながりを持っている所があるということだ。このことは、100%面積予約実現をめざす農協の統制率にも関係がある訳。だから、誰かが云っていた。“伊達(だて)にゃ自動車に乗らんがなあ…”。ということになる。

最近、大豆の増収からアメリカの農産物輸出規制に対する態度に、大きい変化がみえてきました。要するに、これ以上輸出を規制する考えはないとのことですが、それだけで手放して喜ぶ訳には行かないと思います。

遅まきながら10月号をお送り致します。(K生)

あとがき 酷熱の残暑も、あっという間に過ぎて10月に入るとめっきり秋めいて紅葉の頃になりました。

最近、大豆の増収からアメリカの農産物輸出規制に対する態度に、大きい変化がみえてきました。要するに、これ以上輸出を規制する考えはないとのことですが、それだけで手放して喜ぶ訳には行かないと思います。

遅まきながら10月号をお送り致します。(K生)